

自然的にのみ

—— ジョン・トーランドとユダヤ人の問題 ——

凡例

括弧（）による補足は論者による補足であり、亀甲括弧による補足は訳者による補足である。また、訳の前に、訳者による簡単な歴史的経緯を付記した。

※本論に関連するイギリス国内のユダヤ史

中世前期まで比較的安寧な状態にあったイギリス在住のユダヤ人は、民衆やキリスト教からの伝統的反感、ジョン・欠地王から始まる恣意的な課税に苦しんできた。ついでエドワード一世は、ユダヤ教徒の金融業への従事を禁止し、さらに一二九〇年に、全ユダヤ人をイギリスから追放する命を下した。ユダヤ人の大半は、これによりイギリスを離れることになる。しかし、一六世紀以降、オランダのアムステルダムにユダヤ人難民が急激に増加したこと、ディアスポラの状態にあるユダヤ人をイギリスに呼び込むことで「千年王国」（再

イアン・リースク

（豊川祥隆訳）

臨したキリストが支配する国）を成立させるという目的、そしてユダヤ人たちが持つ潤沢な資金、スペイン勢力に対抗するための知識を見込んだクロムウェルらの意図といった複数の要因が重なり、一六五六年、イギリス政府はユダヤ人の入国を三六六年ぶりに認めることとなる。とはいえ、ユダヤ人の再入国以降も、イギリス国内におけるユダヤ人への反感は根強く残っていた。トーランド（一六七〇・一七二二）の議論には、このような歴史的文脈が存しており、これから——イアン・リースク氏の議論をつうじて——見ていくように、トーランドは、経済的な理由だけでなく、哲学的な観点から、ユダヤ人入植を根拠づけようとしている。

~~~~~  
ジャスティン・チャンピオンが「一八世紀における社会的寛容を最も急進的に擁護したもの（の一つ）」と描写したも

のであるにもかかわらず、ジョン・トーランドが一七一四年に出版した『ユダヤ人を入植させる理由 (Reasons for Naturalizing the Jews)』(以降RNと表記する)は、その著作の立場が提案しうる持続的な注目を受けてこなかった<sup>2)</sup>。この論考では、RNの内容と主張を概説し、また文脈的な説明を加えることで、部分的な修正を与えたい。その修正を行なうにあたり、私は、RNそれ自体だけでなく、トーランドの「ユダヤ主義」についてのより広範な説明を与えることを試みる。すなわち、実際には、この試みがRNの中心的な議論を支持する自然主義的な根拠に関して私の主張を正当化するということを見越して、RNを、ユダヤ人の歴史やモーセの原則とが関わりあうより広い場に組み入れたい。私が主張したいのは、この「ユダヤ主義」へとトーランドが広く関わったことから、この自然主義が直接結果する、ないしは生まれるということではない。そうではなく、その代わりに、「ユダヤ主義」やユダヤ人の入植とともに、トーランドのより広い、哲学的な関わり方の側面、もしくは表れであることを主張したい。ともあれ、私が示したいと思っているように、RNとトーランドの広い「ユダヤ主義」の間には、(暗黙的にではあれ)重要なつながり、もしくは縫合があるのであり、これらは翻って、RNにおける基礎的な問題を明瞭にするのに役立つのである。

私の論文はRNの効力や衝撃といったものを概説することから始める。フランク・マヌエルが言ったように(3)、トー

ランドのテキストは、ヨーロッパのキリスト教圏における根深い反ユダヤ主義の目録とともに、一八世紀におけるユダヤ嫌悪についての、最も鋭敏な心理的分析を与える。私はまた、RNがこの恐ろしい歴史を提示すると同時に、その修辭的な重要性の大部分をラビの訓示からどのように受けているかに注意したい。つまり、おおよそこのテキストは、ラビであるシモーネ・ルツァット (Simone Luzzatto) が、ユダヤ人に対するキリスト教徒の善意を理性的に請願したもの、つまり彼の『ユダヤ人の地位についての論考 (Discorso circa il stato de gl'Hebrei)』を意図的に反復したものであるに等しいのであり、トーランドは、このテキストの重要性を強調し、流布しようと決心していたのである。

RNが示すユダヤ人に対する好意の範囲を確立したのち、引き続き私は——ロックのリベリズムやより一般的な重商主義の影響は疑いなくにもかかわらず——入植をトーランドが支持する事例は、たんなる啓蒙的、ブルジョア的な寛容(そうした寛容が、一七世紀と一八世紀の変わり目においていかに重要であったにしても)以上のものに達していると主張したい。RN自体の重要な細目を精査するだけでなく、『ナザレヌス (Nazarenes)』の補遺(4)において述べられた「二つの問題」と、『ユダヤ人の起源 (Origines Judaicae)』にRNを関係づけることによって、トーランドの主張は、キリスト教による恩着せがましさに還元できないことを見る。実際には、トーランドによる政治の入植の要求は、論理的に、そし

て根源的に哲学的な自然主義から生じている。これが私の結論である。

## 1. 寛容

最も直接に心を打つような文の一面は、ユダヤ人が蒙った迫害についての歴史的な説明である。実際、このテキストは、この歴史に大部分を負っている。トーランドの典拠は、旧約聖書やヨセフスのなかの証言にまでさかのぼるが、トーランドの具体的な焦点の大部分は、中世の時代に向けられている。例えばトーランドが列挙するのは、イングランドにおけるユダヤ人の厳しい苦難であり、それは特に、一二世紀終わりの第三回十字軍（リチャード王の十字軍）から一二九〇年に結果的に起こったユダヤ人追放にわたる。とはいえ、トーランドはまた、イングランドにおける反ユダヤ主義を、より広範な病理的部分的症状であることを記述するのにも心を砕いている。つまり、ナイトン（Knihon）の『編年史』、レイナルディ（Reynaldi）の『年代記』、そしてジャック・バナージュ（Jacques Bannage）の『ユダヤ人の歴史』<sup>(5)</sup>のような出典を引きつつ、トーランドは、「ヨーロッパの諸国のあらゆる年代記は、キリスト教が優勢になって以来、悪しく「ユダヤ人の」血に塗れている」（RNJ, s.X, 22）と結論づける。

例えば、「キリスト教徒の」水に毒を投じるユダヤ人の企みであったり、キリスト教徒の子供を磔にして食べるというユダヤ人の宗教的活動についての馬鹿げた作り話に焚きつけ

られて、ヨーロッパは、反ユダヤの確固たる残忍性に至った。これは控えめにいっても、「ユダヤ人の」恥辱やゲットーにおいて表れているが、ひどい場合ではそれは信じられないほどに残忍なものとなった。トーランドによれば、「非常にしばしば、ユダヤ人たちは、見せかけの理由すらつけられずに、大勢の人によって虐殺された。あたかもユダヤ人は間抜けな羊でしかなく、ユダヤ人たちの敵「であるキリスト教徒」は貪欲な狼であるかのごとく、人間性のあらゆる良識は取り払われた」（RNJ, s.X, p. 23）。

このようなあらゆる苦難をつうじてキリスト教の文化の中心の、構成的特徴であるように見えるのは、ヨーロッパがそのキリスト教的美徳を忘れてしまつたということではなく、むしろ、反ユダヤ主義——そしてそこから導き出される「恒常的な敵」である。実際、トーランドが強調する主要な問題の一つは、王族や司祭らの陰謀が結びついたことが決定的であったということである。トーランドはしばしば、聖職の野心と政治的野心とが結びつき、迷信を信じる大衆を焚きつけたということを主張する<sup>(6)</sup>。

クロムウェルが再入国を認め、そして非公式ながらも寛容が「再入国を」ますます牽引したこともあって、トーランドが著述しているころには、イングランドにおけるユダヤ人の地位はかつてよりも安全であるように見える。しかしそれでもその地位は嘆かわしいほどに恣意的なままであり、正式で

公式的な立場ではなかった。そうしたこともあって、RNの大部分は、寛容に関する同時代の論説に関わろうとしている。例えば、このテキストに対するジョン・ロックの影響は疑いようがないと思われる。

トーランドの最初の重要な著作である『秘義なきキリスト教(Christianity Not Mysterious)』(1695)から、われわれは、トーランドがロックに対して抱く敬意を知ることになるし、また一七〇四年の『セレナへの書簡(Letters to Serena)』において、トーランドは引き続き、ロックを「類まれな」と描写する(8)。RNでは、ロックの『市民政府二論』が引かれているが(9)、ロックの『寛容についての第一書簡』が、[RNの]構成により著しく影響力を持つているように見える。まさにロックが、教会の合法的な領域(魂の気遣い)を政府の合法的な領域(国家の利害、保護)から区別したのと同様に、トーランドもまた、われわれは神学的な原理と公民的な原理を区分けるべきであり、市民権が信仰告白や民族の同一性によつては決して規定されるべきではないときっぱり主張する。ロックの『書簡』は、結局のところ、(神のみ言葉として、)新約聖書をユダヤ人が信じないということが、なら他者の市民権に対して影響を及ぼさないと主張するが、そのテキストのブルジョア的なリベラリズムは、[RN]によつて、完全に開花するように見える。

## 2. 商業

もしRNが典型的にリベラルな著作であると考えられるならば、その政治的な主張が主に商業的な有効性にもとづいて打ち立てられているように見えるかぎり、それは同時にまったくブルジョア的なテキストとして読むことができる。結局のところ、トーランドの主張の多くは、明示的には重商主義的なものであり、他の考察は、通例的には経済的有用性の原理に従属しているように見える。つまり、異邦人を嫌悪したり偏見を持つことが問題とみなされるのは、そうしたことが資本主義市場が生じる需要や必要性にマイナスに働くからである(10)。確かにトーランドは、彼が支持している「異邦人たちの交流」が、「国内の」交易に問題を引き起こすと述べている。それにもかかわらず、例えば、その国家において「そうしてより多くの仕立て屋、靴屋が存在する」として、結果として、

多くの衣服や靴が以前よりも作られるであろう。もしより多くの織り手、時計職人、その他の職人がいれば、われわれはこれによつて、以前よりもより多くの布、時計、そして他の商品を輸出することができる。そして、多くの民族の労働者が集まることで、商品をよりよく製作できるだけでなく、同じ市場にいる他者のものよりも安く作られているために、より迅速に売り払うことができる。より多い、よりよい、より安いというこの規則は、他の方法や方策と

比較して、ずっと市場を席捲するであろう。(RNJ, s.16, p. 39-40)

一般に、移住と交易の間には、直接的な相関関係が打ち立てられるとトーランドはいう。つまり、「人々が増えれば、輸入量や輸出货量も増えるし、食べ物や供給する農耕地や支払いのための歳入とともに、駐屯軍や軍隊も増える」(RNJ, s.17, p.41)。さらにトーランドは、彼が入植に賛同するのは、「ただこうしたものをより速く、効果的に生じさせるためである」(ibid.)と述べる。トーランドがルッツアットの『論考』に広く依拠していることさえ——これはRNJの最も印象的な特徴であるが——、それは主に内容に関しては功利的、重商主義的なものである。ラビ「であるルッツアット」の著作から非常に多くを引用していることは、間違いなく修辭的には重要ではあるが、しかし、トーランドが『論考』から明示的に引き出している議論は、ユダヤ人は大して面倒を起こさないこと、彼らは義務を果たす市民であること、そして彼らは国家の富に貢献するであろうことをいう以上のものではない(ii)。

この種の商業的な主張を強調するにあたり、トーランドが示している影響は、近世初期の重商主義的思想一般からのものだけでなく、より具体的には、実業家(そして東インド会社の総督)、下院議員、経済学者、そして影響力のあった『貿易につづいての新説(A New Discourse of Trade)』の著者である

ジョサイア・チャイルド卿(Sir Josiah Child)の著作からのものである。実際、上流階級の神聖な権利よりもむしろ規制された自由貿易について論じながら、チャイルドは、製造業、貿易の均衡、負債の移転、商人たちの会社などについての「学問的な」評価を与えるを試みる。また、われわれの目的にとって決定的なことに、チャイルドの『新説』は、実際にある一章をとおして、政治的入植の問題について具体的な注意を払っている。チャイルドにとって、ユダヤ人の商業は、——部分的な反論が何であれ存在するとしても——ただ国家全体の富に貢献しうるものであり、それゆえユダヤ人の一族が、イングランドにおいて安全安寧で「居心地がいい」と感じられるようにするべきなのである。トーランドのRNJも——すでにみたように——これに倣い、商業的な考察を、政治的、道徳的な主張の中心的な要素とする。つまり、ユダヤ人の入植はただ単に善いのではなく、商業にとって善いものである。

### 3. 物質主義

ロック、もしくはチャイルドの衝撃にもかかわらず、そしてトーランドのテキストがさまざまな論説の潮流の結果にちがいないと考えることには——部分的には——疑いの余地はないにもかかわらず、それでもわれわれは、RNJの構成に關して、より複雑な布置を看取することができる。トーランドは、ある点では単にロックの言葉の用法を反復しているだけのように見える。またトーランドは、心配なほどに市場に關

して無批判的である。しかし、これからみていくように、トーランドの典型的なりベラリズム、重商主義への関わりは、より深大で、哲学的意義のある物質主義 (materialism) を基底に持っている。深みにあるこの「基底構造」に注意を向けることで、われわれはトーランドの主張の独自性や意義をより理解できるようになる。

RNZのはじめの言明からしてすでに、トーランドの物質主義的な信条を明白に示している。人間は(無情にも)自然主義的な文脈におかれる。われわれは、「王国のなかの王国」としてではなく、種の種類のうちにある王国として定義される<sup>12)</sup>。ある動物は、生まれて数ヶ月のうちに比較的独立することができ、親族、知り合い、友情、もしくは仲間の絆なしに生きることができ(RNZ, s.1, p.1)。しかし人間は、「他の動物よりも長く扶養の状態にあり、そしてその後でも他の人との交流なくしてはまったく生存できないため」(s.1, p.2)、根本的に社会的である。そこで、われわれを合一させるような「契約」は、単に法律的な問題というよりも、存在論的な問題である。それゆえ、推論によって、社会を構成する以前の、独立した、競合する主体との間でこの契約を前提とすることは、せいぜい非歴史的な幻想となるほかないのである。優先されるのは全体としてのわれわれの種であり、同じ種の共同の集合体である。こうしたことが、入植についての議論において中心となる基礎となる。

同じように、トーランドはユダヤ人の入植だけでなく<sup>13)</sup>、入植一般についても論じようとする。トーランドは、民族や文化の歴史的理解についての必要性を強調し、また悪い仕方であられた民族本質主義を否定的な批判の俎上にのせようとする。トーランドにとって、特定の一族や種族に存するようである種の心の才や傾向を想像するような人は、大きく間違っており、「自然の傾向性」ないし民族的、「人種的」性格といったものよりもむしろ、いかにして「統治や教育の異なった方法が、世界中にみられるかくも異なった傾向性についての真の源泉、原因となるか」(Ibid.)ということに、批判的な注意が向けられるべきである。われわれは常に、政治的、宗教的権力による意図的な操作について——もしくは、トーランドが「司祭や政治家が利を得るとき、平民がかき立てられていること」(s.9, p.21)と描写するところのものについて意識していなければならない<sup>14)</sup>。われわれは「神の栄光」(これは「宗教的偏狭者が口にしたとき、いかなる言葉のなかでも最も恐ろしく血塗られた表現である」(s.10, p.23))に関して宗教的に熱狂することの恐ろしい帰結について認識するべきである。そしてわれわれは、歴史の出来事、移ろい、偶然性に注意を向けるべきなのである。RNZの大部分が関わっているのは、こうした主張である。

この(暗に批判的な)物質主義は、トーランドの具体的な主張がもとづいている基礎である。トーランドにとって、自然のうちのわれわれの立場——もしくはわれわれの「種存在」

ともいえるもの——は、政治的なコスモポリタニズムにたいして究極的な正当化を与える。そして究極的には、トーランドの関心は、「人間性の促進、および全人類に益を成すこと」(RNL, s.2 p. 5)なのである。そこでこの哲学的な自然主義は、なぜトーランドが——見たところ唯一——ロックによる「寛容」の要求さえも超えゆき、そして完全な入植を要求するかについての最善の説明であるように思われる。

#### 4. 二つの(もしくは三つの)問題

トーランドがRNLでおこなった主張の性格や、それを特徴づける物質主義の性質をより理解するために、われわれは、ユダヤ民族に好意的なトーランドのもう一つの著作である、彼の『ナザレヌス』(以降Nと略記)のうち、「ユダヤ民族と宗教に関する二つの歴史的、政治的、神学的問題」と題された附録と比較して、もしくはその観点から、RNLを読むことができる。このテキストは、不十分な説明ながら多くの提案に満ち満ちており、RNLよりもまったく複雑な(そして錯綜した)もののように見える。いくぶん簡潔につづめて言えば、「二つの問題」は、ほとんどある種の拡大解釈を必要としている。

例えば、トーランドがこの作品の出だしで用いる警句からしてすでに、目下の問題の不安定な、謎に満ちた性質を示唆している<sup>15</sup>。引用された句の「さすれば君は私にとって偉大なアポロンとなるであろう」、これは「空の広さが三尺し

かない地はどこか示せ。さすれば君は私にとって偉大なアポロンとなるであろう」というより長い句の一部で、ウェルギリウスの第三『牧歌』のなかの、ダモエタスとメナルカスという二人の羊飼いの間で起こる罵り合いの描写からきており、最終的にこの罵り合いは明らかに解けない謎を互いにかけることで終わる。それゆえ、トーランドの意図的な文句は、なんらかの断言的な言明というよりはむしろ、謎として後続するものを形作っている。

そして、本質的には、トーランドのテキストが提起する「謎」は、次のようなものである。(1) ユダヤ民族が持つモーセの原初的な「おきて」は、ユダヤ民族の核となる同一性を維持するのに決定的であつたようである。しかし一方で、(2) 古代のヘブライ国家は、偶像崇拜に傾倒しており、また(特に民族的「同質性」に関して)常にモーセの原初的なおきてを破っていたようである。それでは、いかにして、この見たところ不調和な並置を理解すべきであろうか？

(1) は、原初的なモーセの考えの神学的・政治的有効性を説明するように思われる。奇跡や旧約聖書の預言といったものの役割を退けつつも、トーランドは、「ユダヤ人の政府や宗教の本来的なおきて」が、いかに

国家の完全な転覆から一七〇〇年以上もたったあとで、また住むことのできる地上全体に「ユダヤ」民族が離散して

しまったあとで、そしていかなる主権者にも援助、支持されることもなく、むしろ全世界の軽蔑と憎悪にさらされながらも、それでも彼ら「ユダヤ人たち」が彼ら自身を独立した民族に保ってきたか (Z, p. 237)

について証示することができるかを述べる。簡単に言えば、モーセの与えたユダヤ人の「基礎」の性質、特性は、いかにしてユダヤ人が一貫、独立した民族同一性を維持したかについて、最善の説明を与えるように思われる。

それにもかかわらず、そしてこの称賛すべき遺産があるのにかかわらず、ユダヤ民族国家の歴史的な記録それ自体は、原初的なモーセの考えによって据えられた基準を欠いているように見える。トーランドが伝えるように、古代ユダヤ人たちは、「常に粗野な偶像崇拜に傾倒したり、彼らがバール神、ヤハウエのどちらに従っているのか、いつもどっちつかずであった」(Z, p. 238)。そして、ユダヤ人が民族的分散を注意して避けていた一方で、古代ユダヤ人は「彼らの基礎的な法に反して、他の国民の女性と交わり、結婚する強い傾向」(Ibid.) を有していた。簡単に言えば、モーセの考えの純然たる力は、ユダヤ民族の同一性の持続において明らかではあるが、それでもその同じモーセの考えは、古代ユダヤ社会においては、決して完全な仕方では顕在化しなかったのである。

この明らかな謎にいかにして取り組むべきかを理解する点

では、このような二つの問題は、トーランドによれば、第三の（そしてより概念的な）問題——つまり、われわれは偶然や偶然性についてのきちんとした合理主義的理解を欠いているという問題にもとづいているということが意味を持っているように思われる。この「第三の基礎的な問題」に関して、トーランドが何を述べているかに焦点を当てることで、われわれは、一般にどのような意味で、トーランドの取り組みが主として哲学的であるかについて、より明白に理解することができる。トーランドの主張によれば「運命」「宿命」そして「偶然」といったものは、説明ではない。そうしたものは、彼の探究に適切な役割を担いえないのである。

より具体的に言えば、「第三の問題」が明らかにしているのは、認識論的な欠点を存在論化することの危険性である。トーランドの主張では、因果的なつながりを理解する困難は、因果的なつながりが存在しないことであると見なされるべきではない。原因を知らないことは、明らかに原因が存在しないこととは別なのである。言い換えれば、われわれの理解を超えるものについてはなんであれ、「偶然」を帰属させることに懐疑的であるべきである。「事物が偶然的と呼ばれうる根拠は、絶対的には、事物のうちに存在しない」、そして「事物が偶然的とよばれるのは、われわれの認識の欠如のためではない」(Ethics I, p. 33, school.1) と考えるスピノザに明らかに従いつつ、トーランドは、「偶然」という概念に対する疑念を表明する。



偶然は、思慮分別のある人にとっては、その原因が未知もしくは予測できないような結果を指示するということは、何よりも明白である。とはいえ、世間の人々は、偶然によって、原因をまったく持たない結果を意味する。そして、世間の人々は、自然のなかの最も注目すべき現象のいくつかについて、あたかも現に原因なしに結果がありうるかのごとく、もしくはこの原因は、それ自身を規則的に生み出す他の原因なしにありうるかのごとく、さらにはわれわれがじかに、直接〔原因を〕知覚しない場合、原因は存在しないかのごとく、（確かに）それら〔そうした現象〕は偶然生じると厳肅に宣言するのである。（*N. p. 236*）

この原理は、二つの「指定された」問題を解く解釈のカギのようなものを与えるように思われる。われわれが事象を哲学的に眺め、偶然、摂理、選び、神的な定め、そして「奇蹟的な出来事」といった概念を捨てるとき、われわれはユダヤ人の（民族同一性の保存の）達成を、ある重要な哲学的原理の顕れとして理解することができる。その一方で、古代ユダヤ人たちの欠点（「基礎的な法」に従って生きなかったことについて）を、物質に関わる現実に関連して、同じ原理の顕れという限界であるということができる。トールランドからすれば、モーセの理想である「慣行の内在的性質やおきて」（*N. p. 236*）は、すべての政治的原理のうち、最上のものの一つであるに留まる（ただ、さほど重要ではないとはいえ、別の箇所ではトールランドは、ハリントンの『オセアナ』を「史上最も

完全な形態の国民政府」と言及しようとしている<sup>16</sup>）。しかしながら、われわれは、同じモーセの理想が「決して完全に実行されたことはなく」そして「不完全な模倣」（*imitation*）をつうじてのみ、表明されたということを覚えておかなければならない。

言っておかなければならないが、こうしたことはどれも、最上の明白さをもって打ち立てられているわけではない。しかしそれでも、全体としての要旨を引き出すことは可能である。つまり、トールランドの「ユダヤ共和国」の扱いは、明確に哲学的である。言ってみれば、問題は、神話的な外殻から合理的な核を引き出すということである。そしてまたこのことは、「二つの問題」の大半を構成しているほのめかし、参照、言語表現の見かけ上のもつれを説明することに役立つ。トールランドは、「ユダヤ的共和主義」ともいうべき広い伝統に関わって（そして入り込んで）いる。この伝統は、一七世紀の政治的言説に非常に重要であって、その当時の「共和国」を聖書から正当化したり、その基礎を求めることに関わる、多分にプロテスタント的な問題であった。それにもかかわらず、トールランドは同時に、この問題を単に哲学の観点から扱うことで、その同じモーセの問題を世俗化しようとしているのである。

例えば、トールランドは、古代ユダヤ国家を一種の共和政府の典型であると示した、先行するヒューマニストの著作を念頭においていることを明らかにする。実際、トールランドが言

及するテキストのうちの二つ——カルロ・シゴニオ (Carlo Sigonio) の『ヘブライ共和国について』(De Republica Ebraeorum) (1582) やペテル・クナエウス (Peter Cunaeus) の『ヘブライ共和国 (The Hebrew Republic)』(1617) ——はおそらく、一六世紀後半から一七世紀におけるキリスト教的ユダヤ主義の形成に対する最も重要な貢献である<sup>(17)</sup>。さらに重要なものでは、トーランドが引き合いに出すジエームズ・ハリントンの『オセアナ』は、ある重要な版が十年前にすでに出ていたが、これはイギリス革命の熱狂した千年王国論による活力によって形成されるときに、その活力が形成されるのも補助したテキストであり、「神の国として、主は共和国であった。それゆえ神の国は神の子となろう」という主張に対して、聖書からの支持<sup>(18)</sup>を与えるものでもある<sup>(19)</sup>。それほど的是はずれではなしに、トーランドはハリントンの「プロテスタントのマキャベリズム」<sup>(20)</sup>（そして古代イスラエル王国は、イギリスの共和国の正当化を与えるという主張）を、同一の「ヘブライ共和主義」の分野のうちに位置づける。トーランドの根拠は、目に見えて十分に挑発的で、さらに激情的でもある混合物なのである。

しかし、トーランドが前提としている学術的なレイ・ライオン、古代と近代とのつながりがいかに説得的であろうとも、ここでの主要な論点は、最終的には、千年王国論の熱狂とはほとんど関係ない。もう一度言えば、トーランドが示すのは哲学的な主張である。そこで、「原初的な純粋さをもったモー

セの共和国の卓越性、不滅性」(Z, p. 230) について語るにしても、トーランドの問題は確固として非神学的であり、そしてひよつとすると反神学的ですらある。この箇所でトーランドが引き合いに出す「永遠性」は、客観的に正しい考え、いわば「形相」の永遠性である<sup>(21)</sup>。トーランドに関する限り、大衆的に想像されるように、「この形態の政府が即座に、シナイ山の上の天からモーセに啓示された」(Z, p. 239) としても、モーセは哲学的な真理をはっきり理解していた。そういうわけで、モーセの体系の重要性のためにトーランドが示す主な「証拠」は、ほかならぬ「完全無欠な政治家」(Z, p. 238) であり、もちろんブラトンやアリストテレスの知的な後継者であるキケロであるという、印象的な特異性があるのである<sup>(22)</sup>。キケロがわれわれに示しているように、「あらゆる国内の分裂、外的な圧力（そして何であれ「常に生み出される個人の墮落」があるにもかかわらず、一定のままであるような政治的理想、原理を特定することは、「とりまなおさず不滅であろう統治」(Z, p. 239) を特定することである。永遠性、そして不滅性は概念的であり、神学的であるというよりも、スピノザの直観的知識に似ているように思われる。そしてわれわれは、モーセの偉業を、(神的宣託を靈感によって受容するというよりもむしろ) 政治的理想を認識したものと理解するべきである。

もう一度言えば、トーランドのテキストは、あらゆる種類の千年王国論の主題と共鳴し、ヘブライ共和国の宗教的な靈

感に助けられた伝播を反響している。しかし、トーランドの意図は、この主題の効力や活力を向け直し、最終的には哲学的な領域のうちに再び位置づけることなのである(23)。

## 5. 『ユダヤ人の起源』

以上のことすべては、ユダヤ人入植についての具体的な問題からわれわれをかなり引き離してしまっているように見えるかもしれない。しかしながら、トーランドの主張をよりよく示すために、ユダヤ的な思想や歴史にトーランドが関わっているもう一つの層を切り開きたいと思う。それは、RCと「二つの問題」の物質主義を理解するためだけでなく、この二つのテキストをより広範で十全な文脈のうちに位置づけるためでもあり、そして今度はその文脈がこのテキストによって明らかにされる。(おそらくわれわれは、議論全体のもつれを明らかにするのに役立つようなもつれの一部について、最も適切に考えることができる。)そしてこれは、何らかの解釈上の押しつけではなく、トーランドの約定を尊重することである。それはつまり、「二つの問題」の冒頭において、トーランド自身がわれわれに、彼の「ユダヤ的」問題のかくも多くの側面を合成するはずの、計画されていた全面的研究である『モーセ共和国』について言及しているからである。この計画はおそらく決して完遂することはなかったけれども、「二つの問題」自体、そして一七二〇年の『ホデグス (Hodgins)』(24)にはもちろんのこと、われわれにとってより重要なことには、一七〇九年にトーランドがモーセについて述べた『ユダヤ人

の起源』(以降OJと略記)のうちにも、一定の残滓が残っている。この後者のテキストを詳細に見てみれば、われわれの探究に対して抗しがたい説得力が得られるように思われる。

OJにおけるトーランドの関心は、方法論的には、聖書と同じ基盤にもとづく、他の歴史的根拠を持ち出す(これは『ホデグス』において採用された種類の探究方法である)ことではない。むしろ、トーランドの論法は、聖書に由来する説明が持ちうる役割を、何であれ否定している。明らかにストラボンの『地理誌』の解説書として、実際にはこのテキストは、ストラボン自身だけでなく、古典の著者——例えばシケリアのディオドロスとキケロ(『神性と神の本性について』——)を引用しながら、まったく聖書にもとづかずにモーセについて説明を与えている。宗教的な歴史は、世俗の歴史に包摂されるのである。

しかしながら、トーランドの挑発は、「方法論的な」ものとどまらない。その内容に関して言えば、OJは、トーランドがモーセという人物を扱う仕方についても、いっそう注目に値する。モーセから神的な地位を奪うだけでなく、OJはモーセ自身を、汎神論的な、そして本質的にはスピノザの教説を普及させる人物として描いている。トーランドがストラボンから引いている、非常に重要な引用では、次のようにある。

(モーセ)は、神的存在を獣や家畜の像によって表象するという点で、リビア人と同じくエジプト人は間違っていると言った。また、人間の形態をもとにして神の範型を作る点で、ギリシア人も誤っていると言った。というのも、モーセによれば、神は、われわれ全体、地や海——そしてわれわれが天や宇宙、もしくは存在するあらゆる自然をとりまいているからである。(OJ, p. 283)

モーセ(そして、トーランドが上で模倣するような「ストラボンが述べるモーセ」)は、「実際」、汎神論者であった——つまり、より現代的な言い回しでは、スピノザ主義者であった。「確かにモーセは汎神論者であった。もしくは、最近の言葉でいえば、スピノザ主義者であった(Mosen enimvero fuisse Pantheism, sive, ut cum recentioribus loquor, Spinozism)」(OJ, 117)。トーランドが解するこのモーセは、物質や世界の統一的结构をはなれては、神性や神的現前(nunten)も存在しないことをわれわれに教える。このモーセは、自然そのものこそが、一にして崇高な神(unicum esse & supremum Deum)であり、「創造」がその「自然の」諸部分、「創造主」がその「自然の」全体であることを示すのである。モーセ、もしくは「ストラボンの解するモーセ」は、道徳的な戒律のみからなる自然法(Naturae lex)をもとにして、儀式、宗教的慣習、もしくは生贄を廃止したような、本質的には市民の宗教を創始したと見なされている。さらに、トーランドの解するモーセは、魂の不滅性(animorum immortalitatis)も

しくは死後の賞罰について、決して述べていない。このモーセが用いている「ヤハウエ」という言葉は、単に必然的に「それ自身で存在するもの(quod per se existit)」を意味しており、ギリシア語のト・オンにかなり近く(OJ, p. 156-7)。以上のことが、モーセのスピノザ化である。

要約しよう。『ユダヤ人の起源』は、「二つの問題」のなかで提示されたモーセの扱いを展開し、より明瞭にする。両テキストをつうじて、トーランドは、モーセの「基本的な」像に関する確立された比喩表現を利用し、参照することができている。トーランドは、タキトゥスから「新たな国家を設立するための鍵は、古い国家の像を保持することにある」(26)ことを学んでいて、トーランドの広い関心の大半は、理想郷についての宗教的な想像を世俗的なものに結びつけることにあると思われる(26)。(マキャベリやスピノザに従い、トーランドは、想像——そしてさらに神話や虚構——の重大な重要性を理解している。)しかしながら、もしトーランドの関心が、まさにこうした「宗教的な想像 神話、虚構といった」ものの効力を世俗的なものに結びつけることであるならば、トーランドの強調するポイントは、一貫して、トーランドの立ち位置や重要性は、哲学的な問題であるということである——そしてもし、こうしたことが「二つの問題」のうちに予兆されているなら、それは『ユダヤ人の起源』において、より十全に強調されているのである。

## 結論

以上のすべての考察により、われわれは、われわれの出発地点であった、トーランドによるユダヤ人入植の支持と、反ユダヤ主義への批判から、かなり遠くまで引き離されてしまったかもしれない。それにもかかわらず、もしRNZの手紙（そしてその精神）に立ち戻るならば、今やわれわれは、「二つの問題」とOが、トーランドによるユダヤ人入植の支持について、「暗にして語られない」次元を強調するのに役立ちうることを見出す。ついでに言えば、われわれが見てきたように、RNZはシモーネ・ルツァットの『論考』を引くことでラビの權威を援用しており、実際、RNZの五分の一は、ルツァットのテキストの直接的な要約なのである。また、さらに言えば、『論考』のなかでも、RNZに対し最も明示的な影響を与えている側面は、均等に敬意を払うことに對する「経済的な」賛同である。実際、この側面は、ユダヤ人を公平に扱うことが、経済にとって好ましいと述べている。しかしながら、同様に注意する価値のあることだと思われるが、このことが、ユダヤ民族に対するより賢明な扱いを支持する議論において、ルツァット自身がいう必要のあったことのすべてでは決してない。『論考』の最初の十章が、この「商業的な」議論に集中している一方で、続く八章は（強くマキャベリを意識した仕方）近代国家にとってモーセの法が至上の重要性を持つことを論じ、普遍的な共和国、もしくはコスモポリスの市民のための原理を与える政治家としてのモーセ

の偉大さを論証するために用意されている。『論考』のこの側面は、RNZ自体のなかでは、その詳細においてまで特徴として表れていないかもしれない。しかし、少なくともわれわれは、『論考』が、トーランドの哲学一般についてはいうまでもなく、彼の広範な「ユダヤ主義」の趣旨と一致すると見ることができる。（同じく注意する価値があるように思われるが、トーランドは、RNZとルツァットの『論考』の意図が「同種のものに近い」と見て、『論考』の完全な翻訳を出版することを計画していたことを明瞭に認めていた（27）。）

確かにわれわれは、ゆるやかに連関する問題の系列に見えるものを、過度に体系化することには用心する必要がある。それにもかかわらず、ルツァットが引かれていることは、やはり、——少なくとも暗示という仕方——われわれが「モーセの哲学」と称するものと政治的な命令の間に、直接的なつながりがあることを示唆している。結局、トーランドの解するモーセが奉じている（もしくは奉じさせられている）物質主義的、自然主義的原理は、確かにRNZの特定の主張のための真の基礎となっている。トーランドによる政治的な入植の支持は、有機的、さらには論理的に、ある深大な哲学的自然主義<sup>28</sup>——（おそらく）モーセ自身が賛同した自然主義から生じているのである。

翻って、以上のことにより、RNZの政治的な主張の十全な意義をよりよく理解することができる。より広範な知的、文

化的潮流のあらゆる影響や関連——重商主義に対するロックの寛容から(2)千年王国論まで——にとつて、おそらくピエール・ルーベ (Pierre Lurbe) が示唆するように、「この本 [RNJ] 全体のなかで最も重要で独自の主張」は、「ユダヤ人は、(...) その起源や歩みのいずれにおいても、人間本性の共通する事情のもと以外の仕方では考えられてはならない」(RNJ, s.9, p. 20) というトーランドの言明である。その言明は、トーランドの物質主義的な確信から直接的に現れた、驚くほどに現代的な主張であり、その主張により、翻つて今日、われわれは「思考可能となる過程にあつたものの証言をする」ことが出来るのである(3)。

#### 参考文献

- Badiou, Alain. *Metapolitics*. Trans. Jason Barker. London: Verso, 2005.
- Barzilay, I.E. 'John Toland's Borrowings from Simone Luzzatto', in *Jewish Social Studies*, 31, 1969, 75-81.
- Berti, Sylvia. 'At the Roots of Unbelief', in *Journal of the History of Ideas*, 56, 1995, 555-575.
- Champion, Justin. *Pillars of Priestcraft Shaken. The Church of England and its Enemies 1660-1730*, Cambridge: Cambridge University Press, 1992.
- Champion, Justin. 'Toleration and Citizenship in Enlightenment England: John Toland and the Naturalization of the Jews, 1714-1753', in *Toleration in Enlightenment Europe*, eds. Ole Peter Grell and Roy Porter, Cambridge: Cambridge University Press, 2000, 133-156.
- Champion, Justin. *Republican Learning. John Toland the Crisis of Christian Culture, 1696-1722*. Manchester: Manchester University Press, 2003.
- Child, Josiah. *A New Discourse of Trade*. London: T. Sowle, 1698.
- Harrington, James. *The Commonwealth of Oceana and A System of Politics*. Edited by J.G.A. Pocock. Cambridge: Cambridge University Press, 1992.
- Karp, Jonathan. 'The Mosaic Republic in Augustan Politics: John Toland's "Reasons for Naturalizing the Jews"', in *Hebraic Political Studies* 1/4, Summer 2006, 462-492.
- Leask, Ian. 'Personation and Undermining: On Toland's Appearing Lockean'. In the *British Journal for the History of Philosophy*, 18/2, April 2010, 231-256.
- Leask, Ian. 'John Toland's *Origines Judaicae*: Speaking for Spinoza?', in *Reassessing the Radical Enlightenment*, ed. Steffen Ducheyne, London: Routledge (forthcoming)
- Locke, John. *Epistola de Tolerantia/A Letter on Toleration*. Ed. R. Klibanski, trans. J.W. Gough. Oxford: Clarendon, 1968.
- Lucci, Diego. 'Judaism and the Jews in the British Deists' Attacks on Revealed Religion', in *Hebraic Political Studies*, 3/2, Spring 2008, 177-214.
- Lurbe, Pierre. 'John Toland and the Naturalization of the Jews', in *Eighteenth-Century Ireland*, 14, 1999, 37-48
- Manuel, Frank. *The Broken Staff. Judaism Through Christian Eyes*. Harvard University Press, 1992.
- Negri, Antonio. *Insurgencies. Constituent Power and the Modern*

- State*. Translated by Maurizia Boscagli. Minneapolis: University of Minnesota Press, 1999.
- Nelson, Eric. *The Hebrew Republic. Jewish Sources and the Transformation of European Political Thought*. Harvard University Press, 2010.
- Ravid, Benjamin. 'Biblical Exegesis à la Mercantilism and *Raison d'état* in Seventeenth-Century Venice: The *Discorso* of Simone Luzzatto', in K.Kravitz & D.M.Sharon (eds.), *Bringing the Hidden to Light: The Process of Interpretation. Studies in Honor of Stephen A.Geller*. Winona Lake, Indiana: Eisenbaums, 2007, 169-182.
- Septimus, Bernard. 'Biblical Religion and Political Rationality in Simone Luzzatto, Maimonides and Spinoza', in Isadore Twersky & Bernard Septimus (eds.), *Jewish Thought in the Seventeenth Century*, Harvard UP, 1987, 399-433.
- Spinoza, Baruch. *Ethics*. Trans. & ed. Edwin Curley. Harmondsworth: Penguin, 1996.
- Sullivan, Robert. *John Toland and the Deist Controversy*. Cambridge, Ma.: Harvard University Press, 1982.
- Sutcliffe, Adam. *Judaism and Enlightenment*. Cambridge: Cambridge University Press, 2003.
- Toland, John. *Life of Milton*. (1698). In *The Early Lives of Milton*, edited by Helen Darbishire, 83-197. New York: Barnes & Noble, 1965.
- Toland, John. *The 'Oceana' and other Works of James Harrington, with an Account of His Life*. London: Booksellers, 1700.
- Toland, John. *Letters to Serena* (1704). Edited by Ian Leask. Dublin: Four Courts, 2013.
- Toland, John. *Adeisidaemon, sive Titus Livius a superstitione vindicatus... Annexae sunt ejusdem Origines Iudaicae 'sive Strabonis, De Moyse et Religione Iudaica historica breviter illustrata*. The Hague: Thomas Johnson, 1709.
- Toland, John. *Reasons for Naturalizing the Jews in Great Britain and Ireland, on the same foot with all other Nations. Containing also a Defence of the Jews against all vulgar Prejudices in all Countries*. London: J. Philips, 1714.
- Toland, John. *Tetradymus containing Hodegus, Cliodopherous, Hypatia, Mangoneutes*. London: Brotherton & Meadows, 1720.
- Weiner, Max. 'John Toland and Judaism', in *Hebrew Union College Annual*, 16, 1941, 215-242.

## 【註】

- (一) Champion, *Republican Learning*, p. 142.
- (二) その一般的な通例の例外としては Barzilay, 'Toland's Borrowings' Champion, 'Toleration and Citizenship' Karp, 'Mosaic Republic' Lucci, 'Judaism' そして Lurbe, 'Toland and Naturalization' を参照。
- (三) Manuel, *Broken Staff*, p. 187.
- (四) 『ナザレウス』の本文は、不確かな「バルナバの福音書」を提示するところで、キリスト教会の法典の確実性を崩そうとしたものである。「それについて」さらに議論することは、目下われわれの目的の範囲外ではあるが、ただ、トーランドのテキストは、キリスト教、ユダヤ教、イスラム教に本質的な共通点を強調する意図があったことに注意すべきで

ある。

(5) トーランドはバナージュのことを「われわれの第二のヨセフス」と呼んでいる。RNJ, s.11, p.27を参照。

(6) 例えば、RNJ, p.26における「大衆によって抱かれ、司祭によって駆り立てられるとき、迷信はかくも危険で破壊的な怪物である」を参照。また、*Letter to Serena*, 3, s.14も参照。

(7) このことについての更なる議論については、論者の 'Personation and Undermining' を参照。

(8) Toland, *Letters to Serena*, p.130.

(9) より具体的にいえば、トーランドの引用は、『第二論』の第五章第四二節からである。RNJ s.16, p.40における、統治権の「行使」について、参照。

(10) 別の箇所では、トーランドは、商業と迷信の根絶を明確に結びつけている。彼の *Life of John Milton*, p.91-2を参照。

(11) ルツァットの重商主義についての議論に関しては、Ravid の 'Biblical Exegesis'、また Septimus の比較研究である 'Biblical Religion' を参照。

(12) また、RNJ p.18, 88を参照。そこでは、人間、犬、家畜がみな等しいレベルで扱われている。

(13) トーランドが論じるように、「一般的な、人種に対する共通する理由は、何であれ他の民族と同じように、ユダヤ人に対しても有効である」(RNJ, s.3, p.6)。

(14) RNJ, s.11, p.26を参照。

(15) 重要なことに、トーランドが『ナザレヌス』自体のはじめで用いている、プリニウス、ルカ伝から引いた警句は、潜在的に危険である秘密を公にするというトーランドの意

図を打ち立てるのに役立っている。

(16) トーランドが編纂した版であるハリントンの『オセアナ』への序文を見よ。

(17) シゴニオ (1531-1584) は、イタリア人のカトリック教徒であり、その著作は、のちのプロテスタントの学界の端緒であると示された。オランダのアルミニウス派であり、またフーゴー・グロティウスの親友でもあったクナエウスは、シゴニオの基盤を拡張したが——このイタリア人とは異なり——ユダヤ人についての深い知見を有していた。

(18) とりわけ『サムエル記上』8、そしてイスラエルの本来の政治的形態は、共和国であったという明らかな示唆などを見よ。

(19) *Oceana*, p.232

(20) 私は、この文言を、トニー・ネグリの *Insurgencies*, p.104 から引いている。

(21) 興味深いことに、一七世紀の偉大な学者で、トルランドも常にその著作を念頭においているところのジョン・セルデンは、聖書で概説されている「自然法」は、啓示や伝統というよりも、むしろ人間性の合理的な把握の問題であることを強調していた。彼の *De Iure Naturali et Gentium* (1640) 第一巻を見よ。トーランドによるセルデンへの直接的な賛辞（「榮譽なしには語りえない」）については、『ナザレヌス』第九章を見よ。

(22) キケロは、トーランドの作品において極めて重要であり、哲学的権威として常に引用され、訴えかけられている。ここでの（キケロへの）一般的な関わりや具体的な訴えかけは、いうまでもなく、王政復古以降の英米圏でみられる



論説の広範な変化において重要な要素であり、それにより、——おおまかに言えば——聖書がローマ「市民」のテキストに置き換えられる。

- (23) この点において、われわれは、アダムサトクリフ (Adam Sutcliffe) が、彼の *Judaism and Enlightenment* においてなした主張に反論することができる。サトクリフはこう述べる。「トーランドは、ユダヤの歴史を世俗化することを試みるけれども、ユダヤ教は、一定の理性的分析から一貫して逃れ、トーランドのテキストにおいても神話的意義が強く残っている。トーランドは、キリスト教の歴史的権威を突き崩すためにユダヤ教を脱神話化する一方で、同時に、自然宗教についての原生的な根源、そして理想郷的な政治のモデルとして、ユダヤ教を新たな単語によって再度神話化しているのである」(p. 204)。もちろんサトクリフは、正當にも、トーランドがユダヤ人の共和国の伝統の力に頼ろうとする仕方を明らかにしている。しかしながら、「再神話化」についてのサトクリフの主張は、誤っているように思われる。これまで見てきたように、トーランドは、モーセによる考えを、神話的で原生的な根源としてではなく、(哲学的な) 原理の表出であると措定している。似たような問題は、ディエゴ・ルッチ (Diego Lucci) の *Judaism and the Jews* でも現れる。ルッチは、明らかにサトクリフを彼の解釈の基礎として用いており (p. 57-58)、そして、トーランドが「ユダヤ人の歴史について、一種の世俗的な神話化を行なった」と述べている (p. 66)。

- (24) 一七一〇年には書かれていたが、『ホデグス』はその十年後に (トーランドの『テトラダイムス (Tetradymus)』の

なかで) 出版された。興味深いことに、*Deist Controversy*, p. 124 のなかで、サリヴァンは、『ホデグス』を『ユダヤ人の起源』の「慎重な英語改訂版」であると描写している。しかしながら、『ホデグス』の論調は耳障りではないにしても、その内容は極めて異なるものである。

- (25) トーランドの版の『オセアナ』における、彼の序文 (p. viii) を見よ。

(26) トーランドによるハリントンの扱い、そしてハリントンの千年王国論を汎神論的に再構成することについての更なる議論については、ジャスティン・チャンピオンの *Pillars of Priestcraft Shaken* を見よ。

- (27) RNL, s.20, p. 48 を参照。「私は、頃合いのいいときに、六〇年以上前に、有名なラビであるシモーネ・ルツァットによって書かれたイタリア語の論考の翻訳を出版するつもりである。」残念なことに、トーランドは、その企てのための適当な時間を見出すことは決してなかった。

(28) もちろん、このことは、政治的な入植のための要求すべてが、哲学的な自然主義を前提としていなければならないことを示唆するものではない。私の論点は、入植についてのトーランドの考えの概略に関するものである。

- (29) これは、もちろんのこと、無神論にまで行き着くものでは決してなかった！

(30) この文言は、アラン・バディウの *Metapolitics*, p. 61 のものであり、失礼ながらもととの文脈を曲げて用いている。